

第1118号 2007年3月1日発行(月1回) - 1日発行(1994年7月13日第3種郵便物認可) ISSN 1343-3849

建築ジャーナル

03

No.1118
March
2007

特集 / 「つなく」「育てる」職能とは? 時代が求める新しい建築家像

ファシリテーター列伝



スギの駅舎にまちの未来を託して

JR日向市駅新駅舎、12月17日に開業

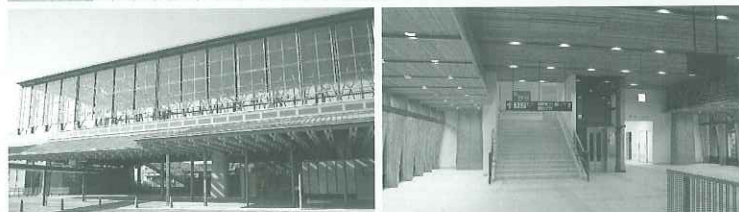
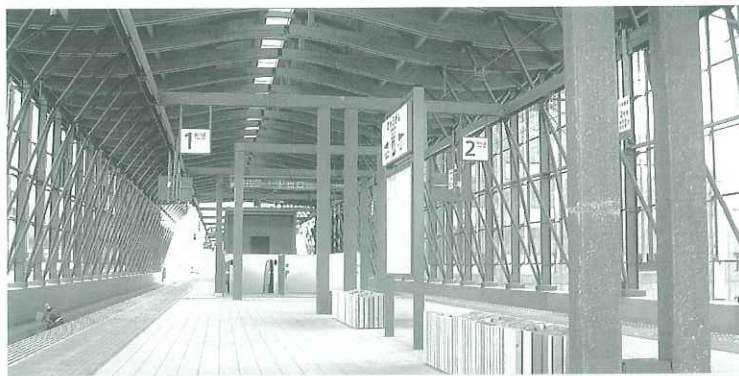
1991年から15年連続でスギの生産量日本一を誇る宮崎県。中でも日向市圏域はその大きなシェアを占めている。そんな日向市の耳川流域産スギ材を構造材・仕上げ材に使用したJR日向市駅が昨年12月17日に開業し(設計:内藤廣氏)、当日のイベントには1万5000人の市民が訪れた。連続立体交差事業に伴って建設された新駅舎だが、「木のかおりのするまちづくり」をテーマに掲げた市街地活性化のシンボルとして、地元産スギ材の新技術の発信源として、まちの将来を背負っている。

全国の地方都市が中心市街地の空洞化に頭を悩ませているが、日向市もその一つだ。1996年、市によるJR日向市駅を含む約1.7kmの連続立体交差事業を始めとして、県による駅周辺の土地区画整理事業、民間による商業集積整備事業に着手。輸入木材の影響や後継者不足で低迷する林業の活性化ももろんで地場のスギを生かした市街地活性化に乗り出した。

これに伴い、「日向地区都市デザイン会議」が発足。委員長にグラウンドスケープの篠原修氏、建築の設計に内藤廣氏、構造設計に川口衛氏らを迎え、市民・商店街関係者と意見交換を重ね、駅舎のデザインを行った。

また、まちづくりシンポジウム、木材工場や建設現場の見学会を開催し、参加を促した。富高小学校では課外授業で製作したスギ材の屋台がグッドデザイン賞を受賞。「日向木の芽会」はスギ材の街灯やベンチを市内に設置するなど、まちづくり活性化の気運を高めた。

駅舎の一番の見所は、ホームの上に架かった幅18m、長さ110mの大屋根だ。柔らかいスギは元来構造材として不向きなため、梁にスギの集成材、柱に鉄骨を使用した世界初のハ



上 | 大スパンでとぼしたホームには柱がなく、すっきりとしたデザイン。スギ材の使用量は駅舎全体で350m³ 左 | 駅舎外観。外からホームの様子がよく見える 右 | 高架下の天井もスギ材仕上げ

イブリッド構造とした。スギの集成材は、荷重に応じて必要な断面を確保する変断面集成材を国内で初めて採用。直線材よりも材積が減り、資源を有効活用できるという。

ガラス張りの防風スクリーンには広告は一切なく、ホームからまちの景色が眺望できる。また、高架下の天井やキャノピーにもスギ材を使用。高架下は壁をつくらず、東西駅前広場との一体化を図り、市民の多目的のスペースとして活用される。

今後は、2013年度の完成を目指して、文化交流拠点となる西

口駅前広場を含む土地区画整理事業および商業集積整備事業を推進し、まちづくりをさらに活性化させる。

新駅舎の完成は市街地活性化の序章に過ぎない。「日向市方式」と呼ばれるこの事業は、3事業を総合化した好例として注目を浴びているが、スギという明確なコンセプトと第一線で活躍する専門家を擁する恵まれた例でもある。昨年、まちづくり三法が改正されたが、他の多くの自治体はいかにして市街地を復興させるか、悩みはつきない。